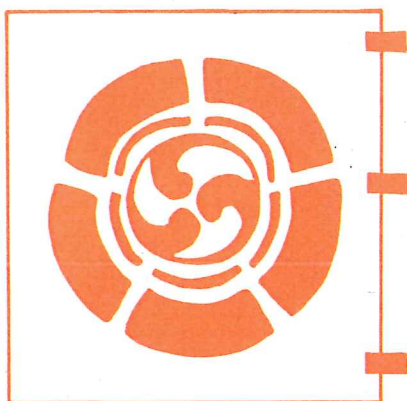


久 野 城 跡

—平成元年度基礎資料収集調査概報—



静岡県袋井市教育委員会
久 野 城 址 保 存 会

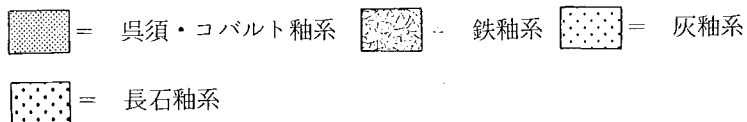
例 言

1. 本書は、平成元年度、国庫補助金・県費補助金を得て、袋井市教育委員会が行った平成元年度久野城跡基礎資料収集調査（発掘調査）概報である。
2. 調査は久野城跡発掘調査委員会の指導のもと、吉岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課）が発掘担当者となり実施された。
3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

1・2・3・4	吉岡伸夫
5	松井一明
6	原秀三郎 吉岡伸夫
久野城跡関係史料・文献一覧	浅井喜作 田中元峰
4. 本書の編集は吉岡が行った。
5. 平成元年度の発掘調査資料は、すべて袋井市教育委員会が保管している。
6. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が行った。

凡 例

1. 遺物実測図の中で中軸線の無いものは、口径復元のできないものである。
2. 遺物実測図の中の陶磁器に使用しているスクリーントーンは以下のとおりである。



目 次

1. 調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の方法・経過・調査体制	1
3. 立地・歴史的背景	4
4. 遺 構	5
5. 遺 物	11
6. ま と め	22

表 目 次

久野城跡関係史料文献一覧	24
--------------	----

挿 図 目 次

第1図 久野城跡位置図 周辺遺跡分布図	2
第2図 久野城跡地形図	4
第3図 本郭実測図（第1面）	6
第4図 本郭実測図（第2面）	7
第5図 北郭実測図	9
第6図 西郭実測図	10
第7図 出土遺物（1）	12
第8図 出土遺物（2）	13
第9図 出土遺物（3）	14
第10図 出土遺物（4）	16
第11図 出土遺物（5）	17
第12図 16世紀代の常滑産甕の編年図	20

図 版 目 次

図版 1 久野城跡遠景	
図版 2 本郭廃棄坑発掘状況 本郭完掘状況	
図版 3 本郭南半発掘状況 北郭完掘状況	
図版 4 北郭縦堀発掘状況 北郭犬走り発掘状況	
図版 5 北郭南半完掘状況 西郭整地面発掘状況	
図版 6 西郭完掘状況 瀬戸・美濃産碗・皿 中国製磁器	
図版 7 常滑産甕 瀬戸・美濃産すり鉢 銭貨 硯 鉄製品	

平成元年度久野城跡基礎資料収集調査概報

1. 調査にいたる経過

久野城跡は袋井市街地の北約2kmに位置する。地元では「城藪」と呼ばれ、久野氏の居城として古くから知られていた。

昭和52年、久野城跡において大規模な開発計画が持ち上がった。「久野城の危機」を直感した高橋嘉雄氏は、子供の頃から城跡に親しんできた地元の人々を集め、昭和52年11月19日、久野城址保存会を結成した。保存会は城跡の草刈り・登り道の整備・説明板の設置を進める一方、会員・一般市民を対象とした歴史講演会を毎年開催する等地道な啓蒙運動を続け、現在、久野城跡の保存・顕彰活動の中心的存在となっている。こうした保存気運の高まりのなか、袋井市教育委員会は、昭和54年10月1日、城域3万9293㎡を袋井市指定史跡に指定し、今後の保存・活用の方途について真剣に検討することとなった。昭和55年度には500分の1縮尺の詳細な現況測量図を作成している。

その後、発掘調査が何度か計画されたが実現にいたらなかった。昭和62年3月、袋井市立北公民館において、久野城址保存会が主催し、静岡大学人文学部教授原秀三郎先生をはじめ、湯之上隆先生、静岡古城址研究会の関口宏行先生をお招きして、「久野城の明日を考えるシンポジウム」が開催された。シンポジウムでは久野城の将来像について活発な意見交換が行われたが、計画を具体化していくために、基本的な資料が不足していることもまた指摘された。

こうしたなか、袋井市教育委員会社会教育課は、1) 文献・縄張・発掘調査を計画的に実施し、久野城の歴史的な位置づけ、特質を浮きぼりにする。2) 「造り過ぎない、飾り過ぎない」整備を前提とする等を柱とする「久野城址保存に関する基本的考え方」をまとめ、昭和62年3月の定例教育委員会に報告した。この「基本的考え方」を踏まえ、袋井市教育委員会は発掘調査の実施について静岡県教育委員会文化課と協議を重ね、城跡整備計画の策定に必要な基礎資料を得ることを目的として、平成元年度より3ヶ年計画で、発掘調査を実施することとなった。

2. 発掘調査の方法・経過・調査体制

i) 方法

発掘調査の方法・遺構の解釈等についてご教示いただき、文献・縄張・発掘調査相互に有機的なつながりを持たせ、適切かつ詳細な保存整備資料を収集するため、「久野城址発掘調査委員会」を設置し、調査全体の統括をお願いした。「久野城址発掘調査委員会委員」は次の方々である。(敬称略)

会 長 高田吉郎(袋井市助役)

副会長 原秀三郎(静岡大学人文学部教授)

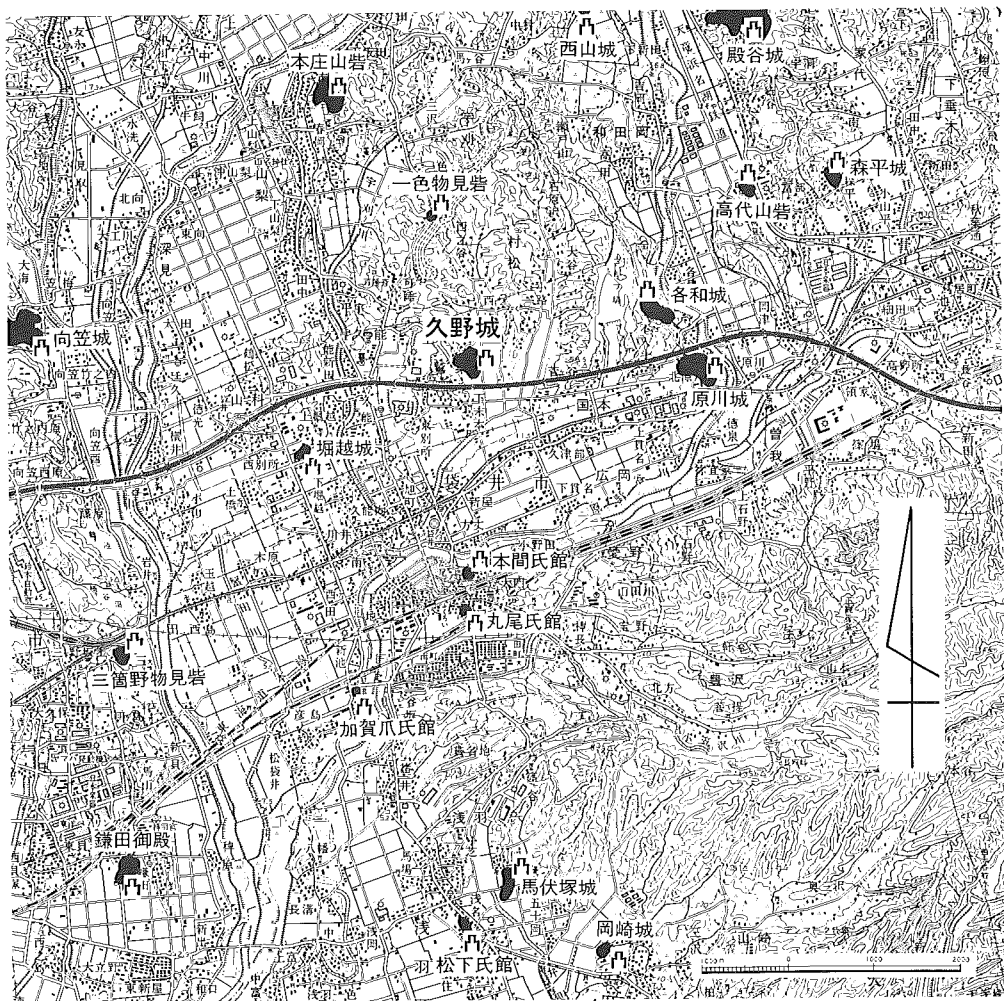
委 員 山下 晃(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究部長)

同 高瀬要一(奈良国立文化財研究所計測修景調査室長)

同 田中元峰(袋井市文化財保護審議会会長)

同 浅井通男（袋井市教育委員会教育長）

現地図面は20分の1縮尺図を基本とし、遺物の出土状態図等は10分の1縮尺で作成した。記録写真の撮影はブローニーサイズ原画（白黒）・35mmサイズ原画（白黒 カラーリバーサル）を併用した。



— 2 —

ii) 経 過

- 平成元年7月4日 第1回発掘調査委員会 発掘調査予定地を視察し、調査方法について検討
- 7月10日～14日 現場事務所へ発掘資材を搬入 袋井市教育委員会作成の地形図（500分の1縮尺）をもとに測量用のベンチマークを設置 遺構確認用のトレンチを掘り上げる
- 7月15日 発掘調査委員会委員による発掘現地検討会を開催
- 7月17日～21日 平面発掘調査開始 北郭にて掘立柱柵を思わせる柱穴列・西斜面の犬走り・縦堀を検出 本郭廃棄坑の発掘を終える
- 7月24日～28日 本郭廃棄坑の写真撮影・実測 北郭を完掘・写真撮影
- 7月31日～8月4日 本郭をさらに掘り下げる 多数の掘立柱柱穴を検出 西郭にて土塁・犬走りを検出
- 8月7日～11日 北郭・西郭を完掘 西郭の写真撮影・実測 本郭の発掘継続
- 8月12日 袋井市立北公民館にて親子体験発掘教室事前勉強会を開催
- 8月17・18日 出土品・現地図面・写真を整理 一部文化財資料室へ運ぶ
- 8月20日 親子体験発掘教室を開催 銭貨2点出土
- 8月21日～25日 本郭を完掘 写真撮影 遺構の実測作業に取りかかる
- 8月28日～31日 本郭の実測作業終了
- 9月2・3日 一般市民を対象とした発掘調査現地説明会を開催
- 9月4日 第2回発掘調査委員会 検出遺構・出土品について検討
- 9月7・8日 北郭・西郭の埋め戻し作業
- 9月11日～14日 本郭を埋め戻し、現地発掘作業のすべてを終了した

iii) 調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 浅井通男

社会教育課長 岩崎 保

文化振興係長 小粥保夫

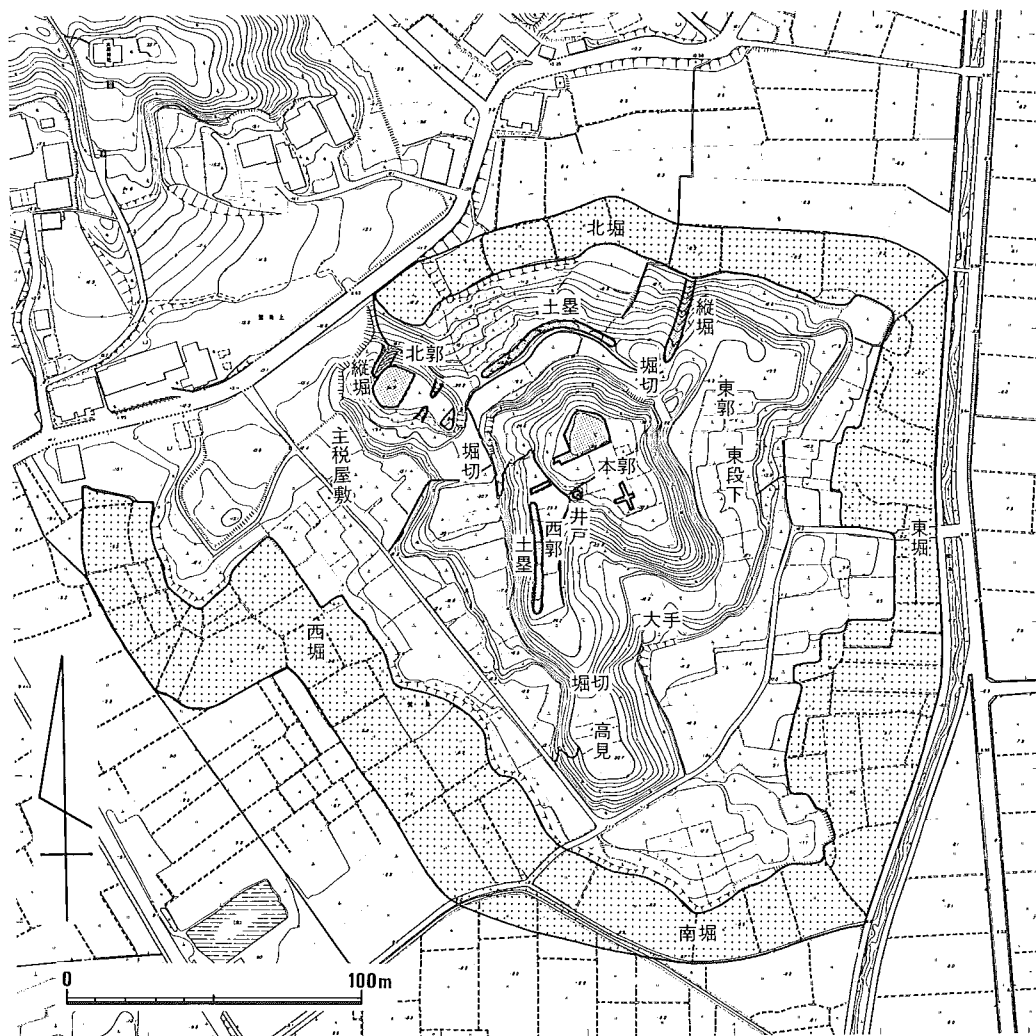
主任学芸員 吉岡伸夫（発掘担当者） 永井義博

学 芸 員 松井一明

主 事 建部千代子

現 地 調 査 調 査 補 助 員 早川保子 寺田矩江 山本はつ江 大谷明弘（国学院大学学生）
守屋豊人（奈良大学学生）

発 掘 作 業 員 木村拓 高橋覚司 高橋邦夫 高橋四郎 宮川正巳 山本修
山本喜久 石原と志 木村いそ 高橋さか江 長谷川里子 八
谷みさを 松村うめ 山本つぎ 山本みつ江 山本むつ子



第2図 久野城跡地形図

3. 立地・歴史的背景

袋井市域の南部を占める小笠山丘陵は厚い礫層からなる。この礫層は北西に延びて、油山寺可睡付近と山名小学校付近、磐田原地の北部にまで達し、基盤層を形成する（大庭1983）。久野城跡はこの可睡丘陵から南へ延びる支陵の先端、さらに舌状に張り出す固い礫層の尾根に立地する。城域は約39000 m²と比較的小規模である。

標高約34m（低地との比高差約26m）を測る本郭を中心に、西から南へ幅の狭い西郭が造られている。西郭の先端は幅約7mの浅い堀切を介して小規模な郭（「高見」と呼ばれる）となる。また北西に続く丘陵と本郭の北東縁を堀切により切断し、北郭・東郭を造り出す。本郭の北側には一段低く腰郭様の平坦面がめぐり、西・東側にも数段の郭が見られる。本郭北側の腰郭北縁と西郭の西縁に土塁痕が、本郭の南西斜面には素掘りの井戸が残る。東西の最下段の郭には

長さ約15m、幅約9mの長方形の窪地がある。また城跡周辺の水田畦道をたどることにより、堀跡が復元できる。城跡および周囲には、城跡・北堀・西堀・南堀・東堀・大手・高見・東段下・主税屋敷・ゼンベエ屋敷・大倉屋敷等の小字・孫名が残っている。

久野城跡の北西方約3.5kmには本庄山砦が築かれ、飯田城跡を挟んで森町天方城跡までは約8.5kmである。東方約2.5kmには久野城とはほぼ同時期に築城された原川城・各和城跡があり、約8kmで掛川城にいたる。南東方約7kmに岡崎城跡、約10.5kmに横須賀城跡、南西方約2kmに堀越城跡、約8kmには遠江国の守護所見付端城跡がある。

久野城の築城期については、尾張久野氏・菅ヶ谷久野氏の両系図に明応年間（1492～1501）とあり、明応3年（1494）の今川氏の遠江侵攻に際し、築城されたものと考えられてきた。『本間宗秀軍忠状』（文亀元年＝1501）では座王城と呼ばれている。初代城主久野宗隆は信濃小笠原氏と戦火を交えたようであるが、その詳細はよくわからない。永禄3年（1560）、今川義元に従い桶狭間の戦いで討死した久野元宗にかわり城主となった久野宗能は、永禄11年（1568）、徳川家康の命を受け、遠江に進入した武田の家臣、秋山伯耆守信友と可睡斎の北、鼻欠淵で戦っている（『家中日記増補』大日本史料10—1）。その後の家康による掛川城攻め（永禄11年＝1568）、袋井口の合戦（永禄12年＝1569）、徳川・武田両軍の攻防（元亀3年＝1572 天正元年＝1573）に、少なからず久野氏も巻き込まれたであろうと想像するのは容易である。

天正18年（1590）、徳川家康の関東移封に伴い、久野宗能も転封され、松下之綱が城主となるが、慶長8年（1603）、再び宗能が久野城に入り、8500石を知行している。いわゆる久野藩の成立である。久野宗能は同14年（1609）病没し、宗能の孫宗成が家督を継ぐが、元和5年（1619）、久野宗成は駿遠50万石を領していた徳川頼宣に従って伊勢田丸（現三重県度会郡玉城町）に移り、紀伊和歌山藩の重臣として、近世幕藩体制のなかにその地位を永続させていく。

その後、城主となった北条出羽守氏重は、寛永17年（1640）、下総に転封され、久野城は横須賀藩の預かりとなり、正保元年（1644）、廃城（藩）となった。氏重の墓は北原川の上嶽寺にある。

4. 遺 構

i) 本 郭

本郭北半の発掘調査区は、当初から一段高くなっていた平坦面にあたり、何らかの建築遺構が残存しているものと予想されていたが、厚さ20～30cmの表土（耕作土＝砂礫混じり暗褐色土）を除去すると、すぐに戦国時代の遺物包含層（黒味を帯びた暗灰色土）が露出する。この包含層の上面（第1面）で遺構の輪郭が確認でき、包含層のいくらかは、耕作等によりすでに削平されてしまったものと判断される。

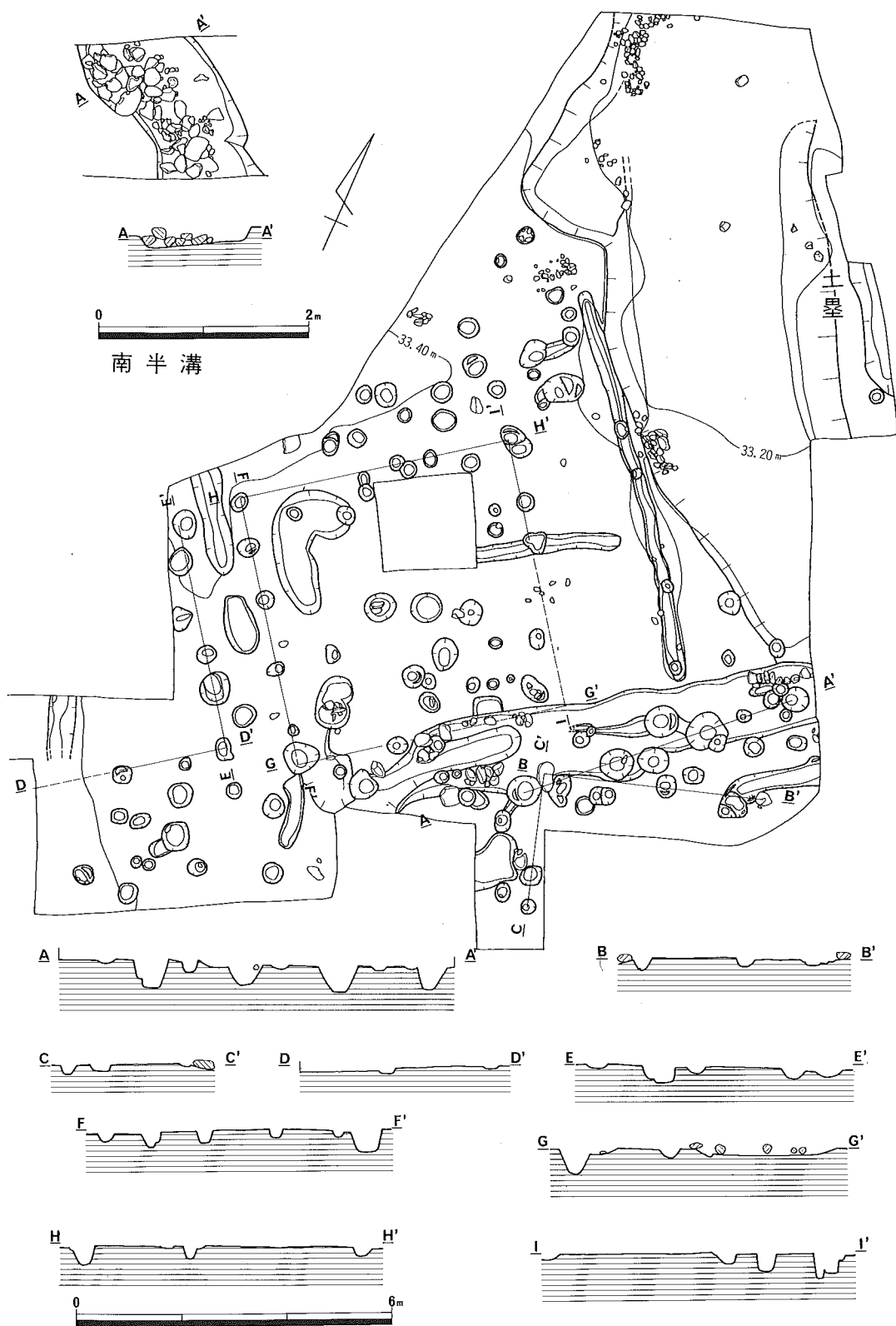
第1面において検出された遺構には、広範に広がる廃棄坑（004・002）、南北方向に延びる溝（001）、柱穴、その他の堅穴がある。

廃棄坑（004）は平面不定形（東西幅約8.5m、南北幅約11m）をなし、発掘調査区のはほぼ半分を占める。断面は浅いすり鉢状を呈するが、底面はおおむね平坦であり、人為的に掘り込まれた穴というより自然の窪地を思わせる。南東隅に深さ約35cmの落ち込みがある。暗灰色



第3図 本郭実測図（第1面）

土を覆土とし、ブロック状に集積する多量のこぶし大礫（焼礫を含む）と灰を含んでいる。灰は一部層をなしていた。この灰層には多量の炭化物和鉄釘が混じっていたが、ある程度形を残す木材は認められず、他所にて焼却された建築材等の灰のみを礫と共に廃棄したものと思われる。他に小規模な廃棄坑（002）が2ヶ所ある。浅く広範囲に及ぶことから、これら廃棄坑の形成には整地の意味も込められていたものと推定している。廃棄坑からは多くの陶磁器・かわらけ片をはじめ、長方硯・銭貨・たがね・鎧小札・小柄・柄金具・鉄滓等多種多様な遺物が出土し、また確実に瓦片が伴っていた。



第4図 本郭実測図（第2面）

発掘調査区の東西寄りに幅45～80cm、深さ30cm前後の溝が2条延びる。西寄りの溝は小規模な廃棄坑により壊されていたが、一方東寄りの溝(001)は廃棄坑を切断しており、平行する両溝が併存していたものか明らかでない。他に発掘調査区東隅からも数条の溝様の落ち込み(009)が検出されたが、重複する整地土を溝の覆土と誤認した可能性がある。廃棄坑の北側には柱穴と平面ひょうたん形の堅穴が分布し、堅穴には多量の炭が詰まっていた。廃棄坑の形成時期は16世紀中頃と思われる。

廃棄坑を完掘し、黒味を帯びた暗灰色土を10～20cm掘り下げると基盤層である黄褐色砂礫層ないしは灰色粘土層に達する(第2面)。この基盤層は発掘調査区東寄りで傾斜し始めており、久野城築城以前の自然地形の一端を示していると思われる。傾斜地には砂礫混じりの暗黄褐色土・暗灰色土(013)・暗褐色土が互層を形成し、集積する礫群を挟んでいる。本郭造成時の埋め土であろう。埋め土の東端には基底幅1.3～1.5mで帯状に盛り上がる黄褐色土が確認でき、下層に礫の溜りが認められる。あるいは土塁痕かもしれない。

第2面において検出された遺構には多数の柱穴と溝がある。

柱穴は径30～80cm、深さ15～60cmを測り、黒色有機質土あるいは暗褐色土を覆土とする。発掘調査区南西半に顕著に分布するが、規則的に並ぶ柱穴列を今のところ抽出しえない。13～14世紀に位置づけられる常滑焼瓦片を出土する柱穴もあり、すべてを久野城に係わる遺構とは判断できないが、16世紀中頃の廃棄坑に被われている点、築城期に近時する掘立柱柱穴群と考えている。

発掘調査区南寄りで検出された東西に延びる溝(幅1.2～1.6m、深さ約25cm)も廃棄坑に被われていた。主に炭化粒混じり暗灰色土を覆土とし、底面には凹凸がめだつ。溝中央にさらに一段深い落ち込みや上端の幅が著しく広く柱の抜き取り跡と思われる穴が認められ、壁上半には楕円形礫を用いた石列が残存していた。同様に柱穴を伴い、直角に分岐する小溝が2条ある。規模に大小差が見られるが、堀・柵・垣等の撤去跡とも考えられる。

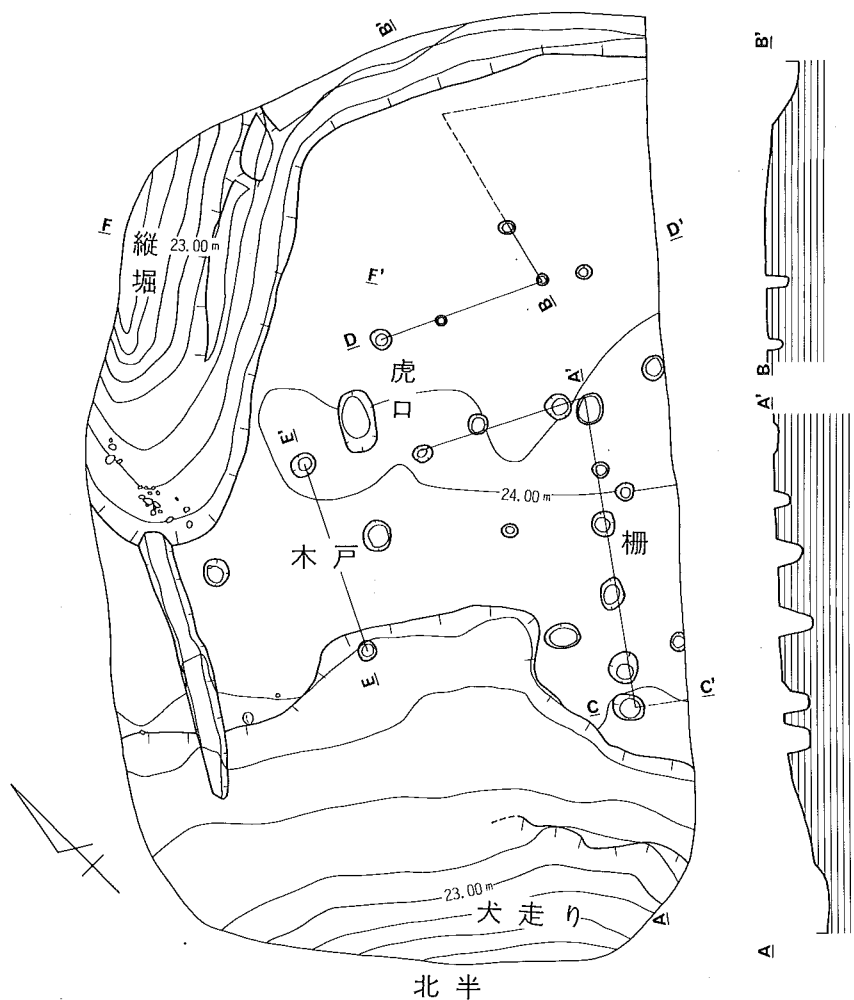
発掘調査区南隅において、礎石を思わせる盤状石(径30～55cm、厚さ約20cm)を2基確認した(4.2m間隔)。2基とも溝の検出面より約15cm浮いており後出的である。

本郭の南半、井戸東側の平坦面に2条のトレンチを設定した。表土下はすぐに基盤層(灰色粘土層)となり、郭の縁から約2m離れ平行する溝(幅約1m、深さ約15cm)以外、遺構は一切認められない。溝内には多量の礫が落ち込んでいた。

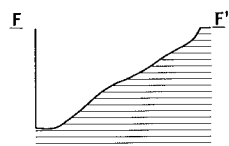
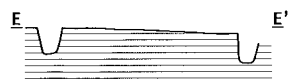
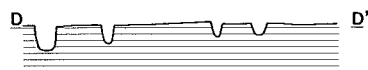
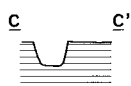
ii) 北郭

北郭では耕作が進み、戦国時代の遺物包含層は見られない。表土を除去するとすぐに基盤層(黄褐色砂礫層)が露出する。

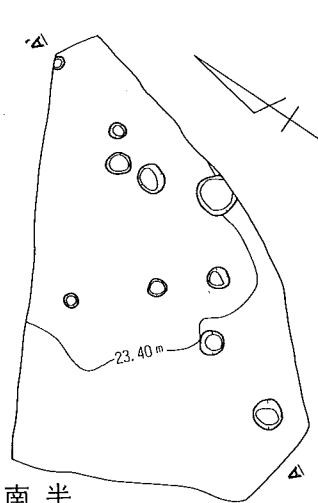
基盤層を削り込んで急峻な東斜面を形成し、郭のほぼ中央にまで達する縦堀を掘削している。縦堀の上位には黄褐色砂が落ち込んでいたが、下位ではレンズ状をなす黒色有機質土が観察でき、ある程度自然に埋没した後、開墾に伴って一気に埋められてしまったものと思われる。発掘調査区の北側は、現在東からの登り道となっており、窪んでいる。おそらく縦堀の痕跡であろう。西斜面にも基盤層を削り込んだ段差があり、傾斜地を介して犬走り様の平坦面にいた



北 半



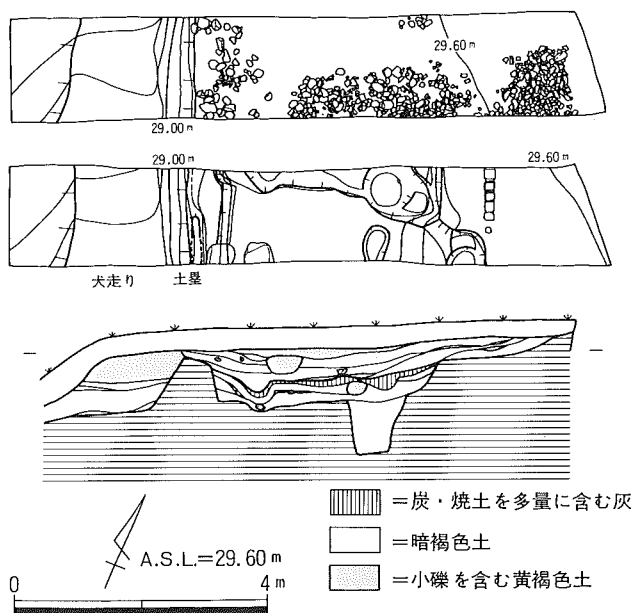
A.S.L.=24.00 m



南 半



第 5 図 北郭実測図



第6図 西郭実測図

る。北東・北西隅には屈曲部が見られ、郭は当初整った方形を呈していたものと推定される。

郭上から東西方向に直線的に伸びる柱穴列と、また郭中央で平行する2条の柱穴列が検出された。柱穴はすべて類似した暗褐色砂質土を覆土とし、径25～50cm、深さ10～50cmを測る。柱穴の間隔は一定しないが、掘立柱を用い、郭の縁にめぐらされていた塀または柵跡と考えられる。柱穴列の北端には虎口が想定でき、若干西にずれて相対する柱穴は木戸跡と思われる。この木戸から幅3m前後の道状の高まりが、尾根に沿って北西

方へ延びている。虎口の外側に平面楕円形の深い落ち込みが認められたが、その性格はよくわからない。

北郭の南端には堀切がある。この堀切を跨ぐ橋等の施設を想定し、一部発掘調査を実施してみたが、耕作が深く明瞭な遺構は検出されなかった。

iii) 西郭

西郭を横断する幅2mのトレンチを設定した。

基盤層（黄褐色砂礫層）を削り込み、郭西縁に幅約1.3mを測る犬走り様の平坦面を造り出す。その内側に土塁状の高まり（基底幅約1m、高さ約90cm）を残している。土塁の東側は再び平坦面となり、約3mで立ち上がる。この立ち上がり（斜面）に沿って、五輪塔（？）を転用した石列が南北方向に延びていた。この石列は基盤層に埋め込まれている。土塁東側の平坦面には柱穴状の落ち込みが4ヶ所認められ、北東隅の落ち込みは著しく大きく深い（径約1.1m、深さ90cm）。

これら基盤層を掘り込んだ遺構は埋め戻され整地されていた。基盤層上面から約35cm浮いた高さに炭・焼土を多量に含んだ灰層が確認でき、厚さ40cm前後の暗褐色土を挟んで最上位（表土直下）には礫溜が形成されていた。礫溜（厚さ約15cm）は平面的に分布する少なくとも3ヶ所のブロックからなり、トレンチ南半に広がっていた。比較的多くの瓦片と陶磁器・かわらけ片を伴っている。土塁の外側はほぼ水平に堆積する暗褐色土と礫溜の土に類似した黄褐色

土により同様に整地されていたが、土塁の内外が同時に埋められたものか判断できない。礫溜に伴った陶磁器片は本郭の廃棄坑（004）出土品と同じ16世紀中頃のものである。

5. 遺物

i) 陶磁器

中国製磁器（第7図1～23）

染付磁器（青花）には1～2の口縁が直立する丸形の碗（碗1類）、3の口縁が外反する小杯、口縁が緩やかに外反する5、6の小皿（小皿1—a類）、口縁が大きく外反しa類よりやや口径が大きい7～10の小皿（小皿1—b類）、口縁が内彎する11、12の小皿（小皿2類）があり、さらに小皿2類は削り込み高台（碁笥底）になると推定される11（2—a類）と、輪高台の12（2—b類）に細別が可能であろう。碗1類は、口縁部に波濤文や列点文、小皿1—a類は外面に牡丹唐草文と内面見込に十字花文、小皿1—b類は外面に宝相華唐草文や牡丹唐草文と内面見込に牡丹文？、小皿2—a類は列点文などが施されている。

白磁には、口縁が大きく外反し体部は丸く作られた13～15、17の小皿（小皿1類）、体部は直線的に大きく開き口縁がやや外反する16の小皿（小皿2類）、型打ちにより作られた18～19の菊小皿がある。菊小皿の18の底内面には「造」（大明年造銘か？）と染付されている。

青磁には口縁がやや内彎しながら直立する20、21の碗（碗1類）、やや外反する口縁をもつ22の碗（碗2類）、口縁が屈曲して外反する小皿の23、小破片で図示していないが白磁菊小皿と同形の青磁菊小皿がある。碗1類は直線と蓮弁先の波文を別々に描いた細線蓮弁文の20と、口唇直下に沈線を1条巡らした21の施文がある。23は内面に2条単位の細線の施文がある。

瀬戸・美濃産陶器（第7図24～43 第8図44～47 第9図77～97）

天目茶碗はいずれも鉄釉掛け、露体部にサビ釉が施されるもので、体部が丸く口縁部の屈曲が弱い26、27、体部が直線化し口縁部の屈曲も強くなる28～30があり、前者が井上編年大窯Ⅰ期、後者は大窯Ⅱ期の製品であろう。（井上 1988 1989）31は小形の天目茶碗である。

平碗は薄手で口縁の作りが鋭い25があり、大窯Ⅰ期の製品である。

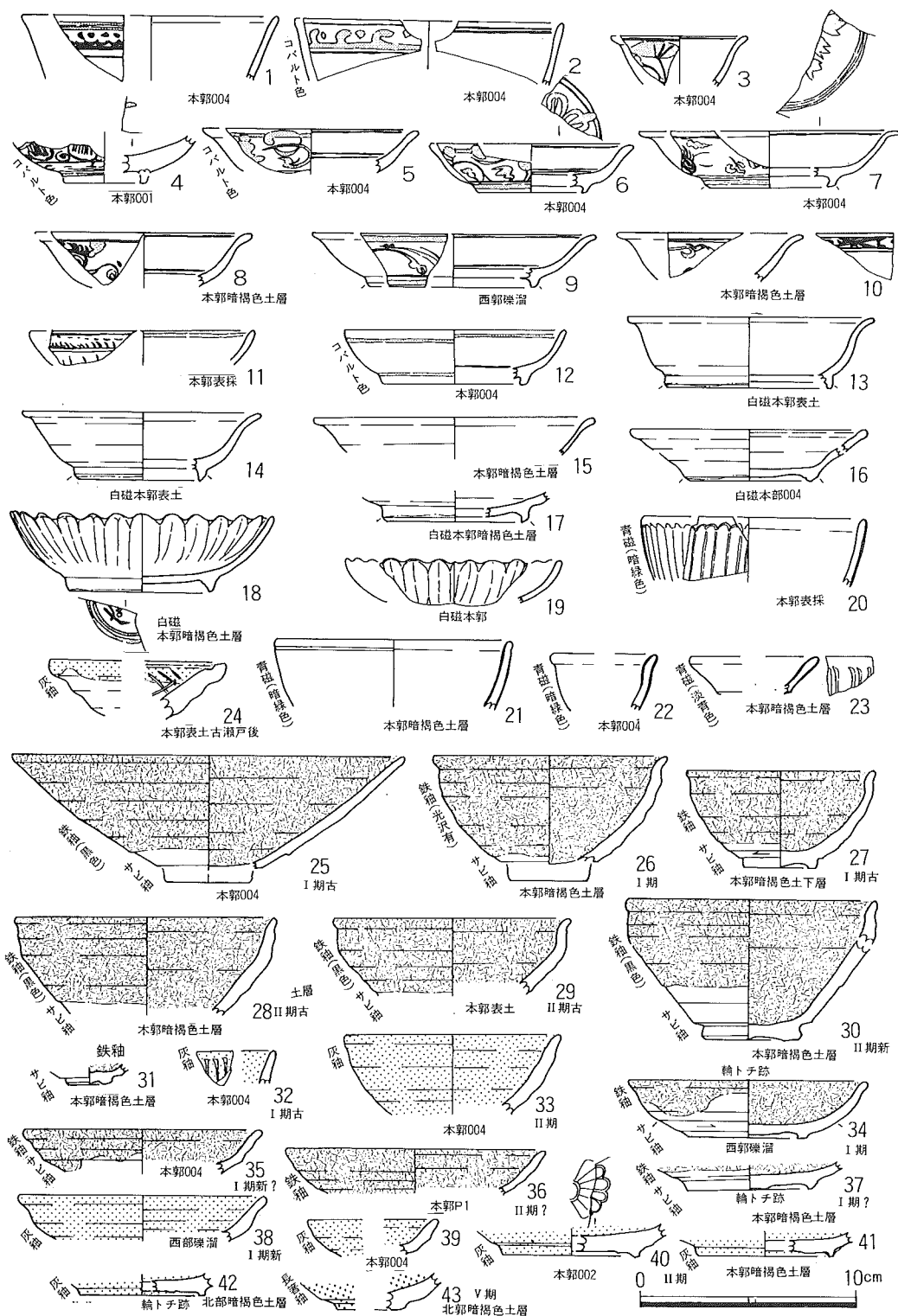
丸碗はいずれも灰釉掛けで、口縁が直立し縦方向の細線が施された32、口縁がやや外反気味で肉厚な作りの33があり、前者は大窯Ⅰ期、後者は大窯Ⅱ期の製品である。

小皿は鉄釉絵掛けで口縁が緩やかに外反する34～36、これと同形態で肉厚に作られ灰釉掛けの38、39がある。口縁部の作りが鋭く薄手の34、35などは大窯Ⅰ期、他は大窯Ⅱ期の製品が主体であろう。43の長石釉の施された小皿はいわゆる白志野小皿で、大窯Ⅴ期の製品である。

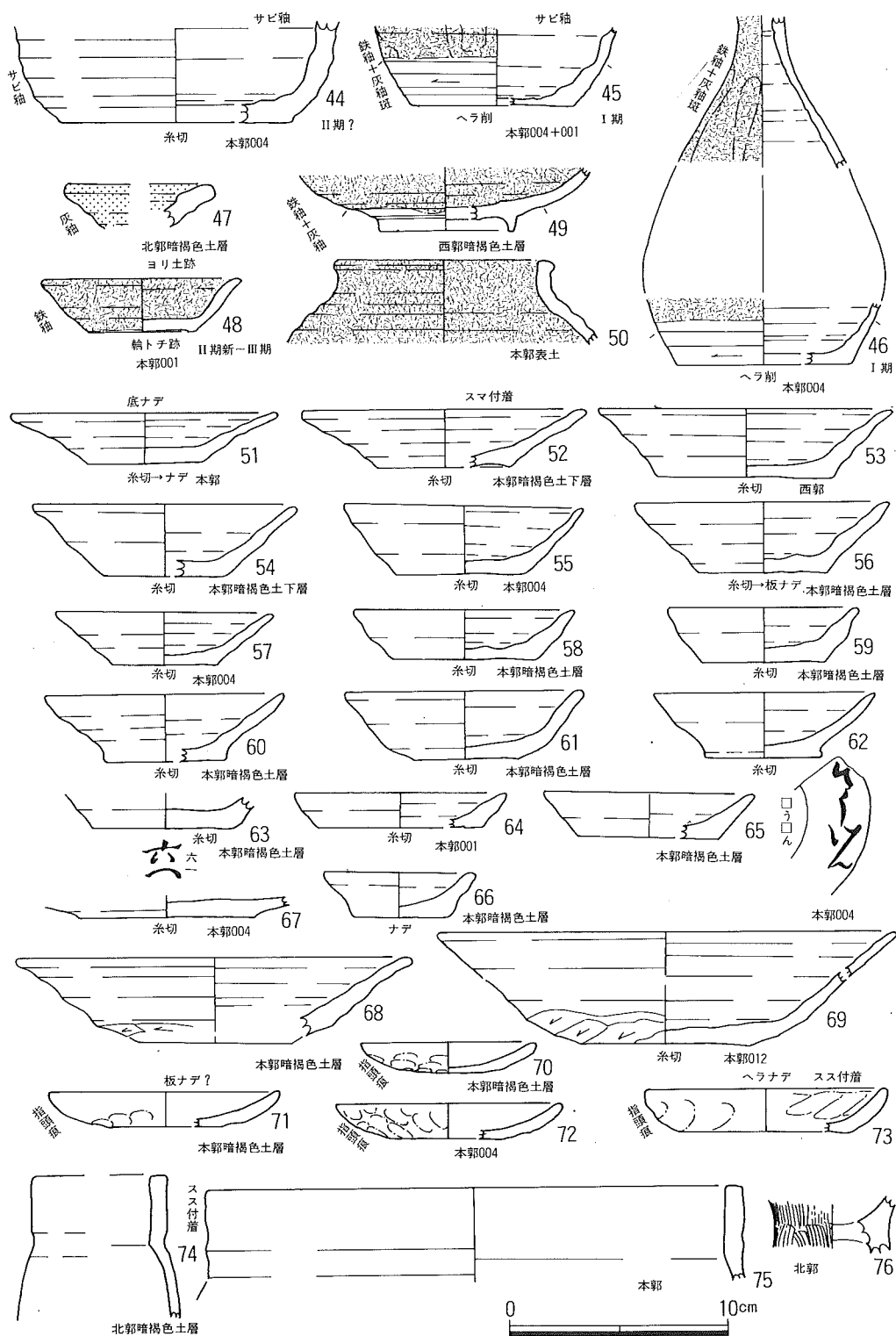
鉄釉掛けの細頸瓶の45、46は作りが薄く丁寧なもので、大窯Ⅰ期の製品と思われる。ほかに作りが雑で厚手の広頸瓶と思われる44があり、すり鉢のサビ釉と同じ釉が施されている。

ほかに口縁が肥厚した鉢で灰釉掛けの47と、口縁部のみに灰釉が施され口唇部内面直下に沈線を施す25の卮皿がある。前者は17世紀後半、後者は瀬戸後期の製品であろう。

すり鉢は口縁部の内側を肥厚する93（すり鉢1類）以外は、折返口縁のもの（すり鉢2類）が主体である。すり鉢2類は、折返部が摘み上げられた程度の77～80、口唇部に面を作るように仕上げられた81、口縁の折返がややはっきりしてきた82、83、86～89、折返が明確になる84、

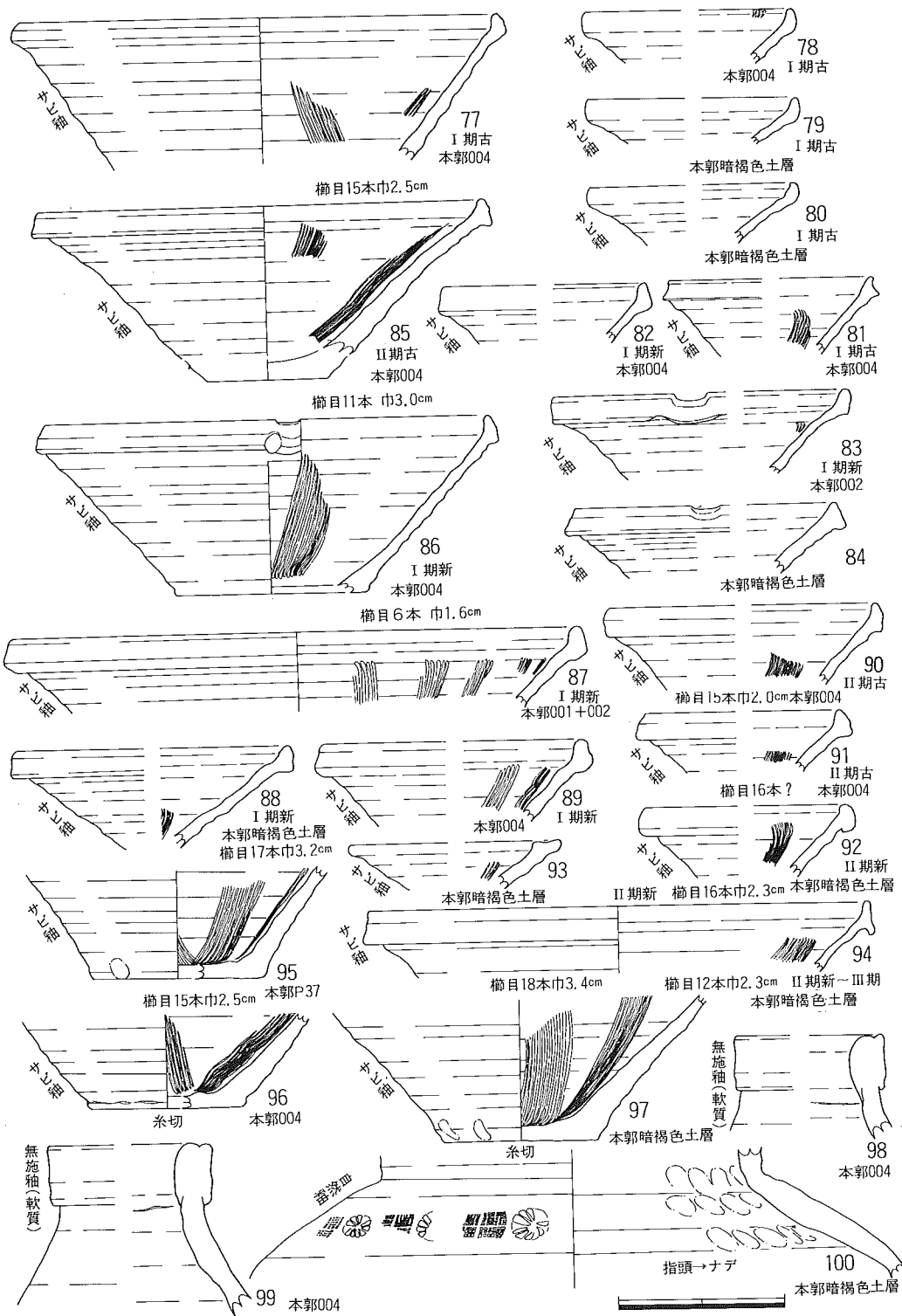


第7図 出土遺物(1) (1~23中国製磁器 24~43瀬戸・美濃産陶器)



第8図 出土遺物 (2)

(44~47瀬戸・美濃産陶器 47~50初山焼・志戸呂焼陶器 51~75土師質土器 76弥生土器)



第9図 出土遺物(3) (77~97瀬戸・美濃産陶器 98~100 常滑産陶器)

85、90～92、折返部端が垂下するように作られた94がある。底部は丸みのある96と、外反気味の95、97がある。77～81は大窯Ⅰ期の古相、82～83、86～89は大窯Ⅰ期新相、84、85、90～93は大窯Ⅱ期、94は大窯Ⅱ期新相かⅢ期の製品である。

なお、井上氏によると久野城出土の灰釉系の大窯製品は、瀬戸産というご教示をえた。

常滑産陶器（第9図98～100）

N字状の口縁で自然釉の付かない赤褐色の軟質の甕である98、99、硬質の焼きで自然釉がかかり肩部に菊花と格子目の組み合わせたスタンプ文が施された甕の100がある。前者は常滑市野間古窯の製品に類似し15世紀後半以降の製品、後者はスタンプ文がしっかりしていることから13世紀代の製品と考えられる（赤羽 1983）。

初山焼・志戸呂焼陶器（第8図48～50）

口縁が外反し鉄釉総掛けの小皿（稜皿）である48、鉄釉＋灰釉掛けの丸碗の49、光沢の無い鉄釉掛けの広口瓶の50がある。48は大窯Ⅱ期新相ないしⅢ期のものに類似し、胎土からは初山焼と思われるが志戸呂焼の可能性もある。49、50は17世紀以降の志戸呂焼の製品と思われる。

ii) 土師質土器（第8図51～76）

土師質の皿を一括してかわらけとして報告する。かわらけは、ろくろ整形もの（1類）と手づくね整形のもの（2類）がある。ろくろ整形のかわらけは、口縁が外反し薄手の作りの51、52（1類—a）、あまり外反しない口縁の53～59、66（1類—b）、口縁が内彎する60、62（1類—c）、口縁の立ち上がりが浅い小皿の64、65（1類—d）、口径12～14cmを測る大形の皿で底部付近にヘラ削り調整を施す68、69（1類—e）がある。1類—bは、口径が9～7cmの53～56、7～6cmの57～59、5cm以内になる小形品の66に別れる傾向がある。かわらけ1類はほかに体部下半がやや丸みを帯びる61、1類—eと同じくらい大形でヘラ削り調整が見られない67などがあるが、1型式として分類可能なものかどうか数が少ないので結論を保留したい。また、1類かわらけの中で62（1類—c）の「□う□ん」、63（1類—b?）の「六一」と読める墨書土器があるが、いずれも意味はよく判らない。

手づくね整形のかわらけは、口縁の内彎が少なく浅い小皿形の1種類で、口径が7cm前後になる71～73、5cm前後の70に別れる。

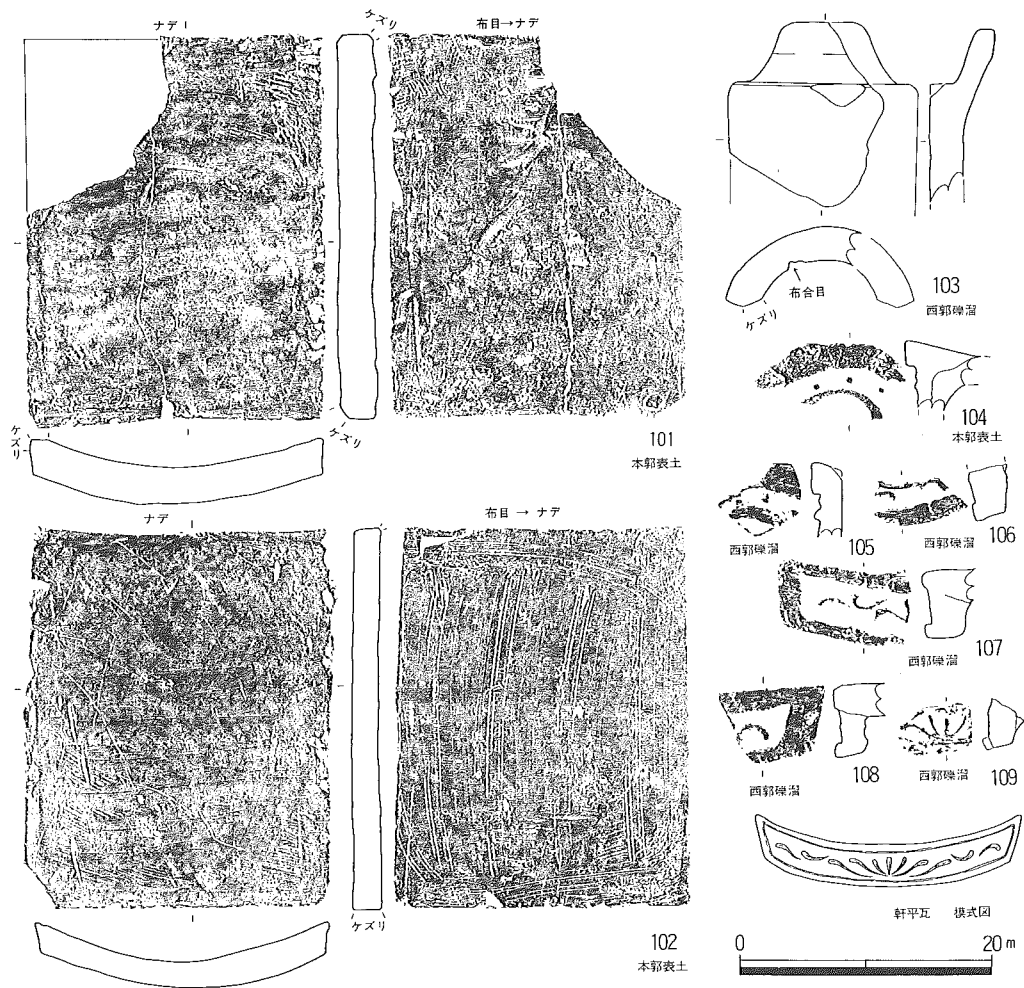
ほかに土師質土器として74、75の内耳鍋がある。遠江・駿河西部域に分布する足立分類内湾型、後藤氏分類C類の内耳鍋だろう（足立 1987 湖西市教育委員会 1987）。76は北郭で出土した弥生時代後期の台付甕の破片で、弥生時代の土器はほかに本郭でも出土している。

iii) 瓦（第10図）

瓦は、本郭、西郭、北郭からテンバコ約10箱出土しているが、いずれも小破片で軒瓦の文様が判るものは少ない。軒丸瓦は、104と105があり、尾の長い巴文で外縁に連珠文が巡る。軒平瓦は106～109があり、それから復元すると幅約30cmの中心が三葉の唐草文である。

平瓦の内特徴的なものに、101と102の凸面に布目痕が観察されるものがある。比較的厚手の瓦で、側面と小口部の角を面取りしている。

瓦の年代は型式の検討をまだしていないが、本郭の廃棄坑（004）内と西郭の礫溜で、瀬戸



第10図 出土遺物 (4)

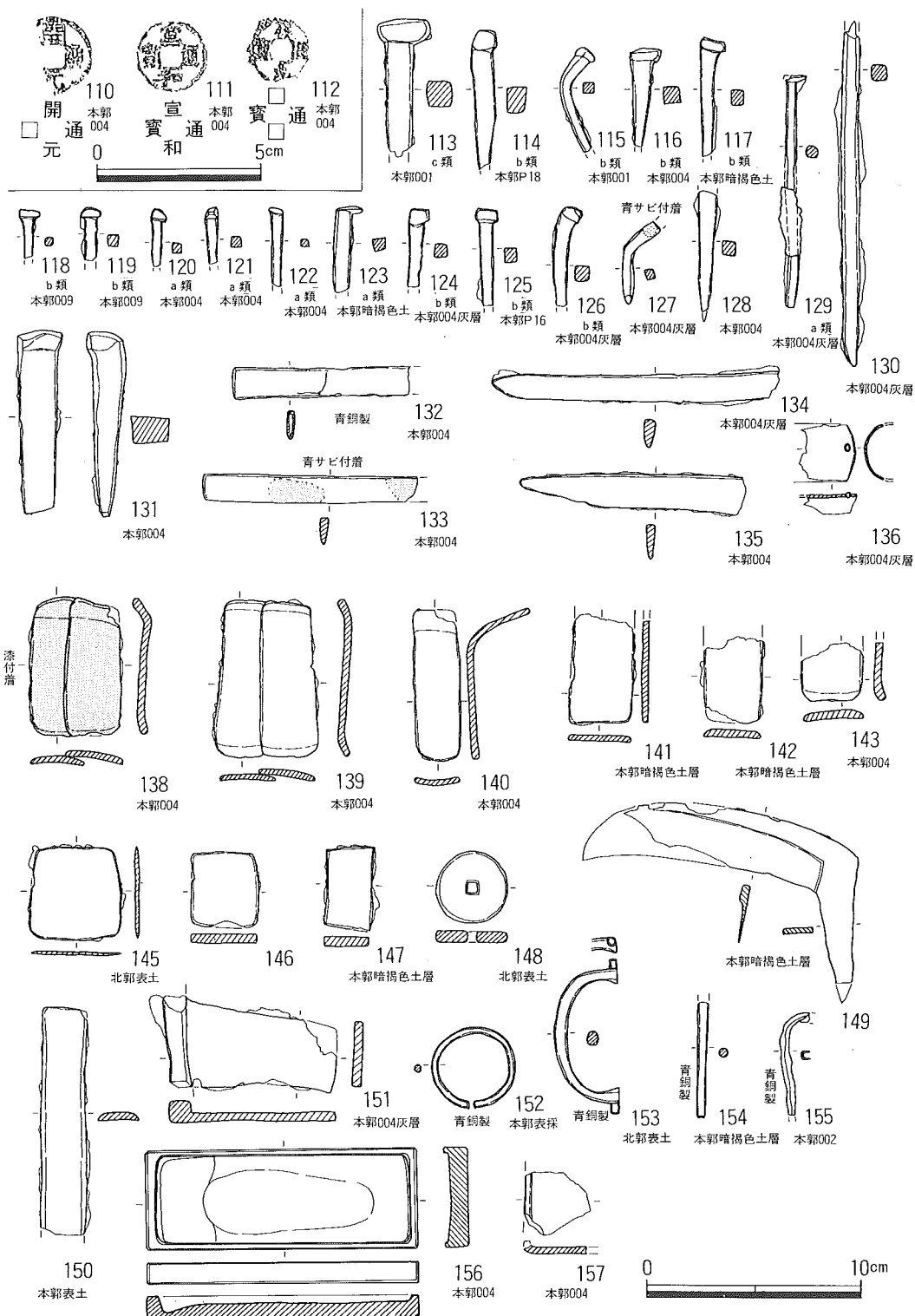
・美濃産大窯Ⅰ～Ⅱ期の陶器と瓦片が共伴していることから、今回図示できた101と102の平瓦を除くものが、瀬戸・美濃産大窯Ⅰ～Ⅱ期の陶器と並行関係にあるものと考えている。詳細には検討していないが、東海地方の城館跡としては最古のものになる可能性がある。

iv) その他の遺物 (第11図)

銭貨は径1.9～2.3cmの3点で、すべて本郭廃棄坑 (004) 出土。いずれも鋳潰れ、錆化が著しいが110は「開元通宝」(初鋳621年)、111は「宣和通宝」(初鋳1119年)と読めた。

粘板岩製の硯の156は長さ12.5cm、幅4.6cm、厚さ0.9cmいわゆる長方硯で、本郭廃棄坑 (004) 出土。縁をていねいに面取りしよく研磨されており、陸部に顕著な使用痕のくぼみが見られる。ほかに、156と同じ石材を用いた157の長方硯と思われる小破片が1点ある。

鎧小札 (138～143) は長さ6.3～7.3cm、幅2.3～3.0cmと長さ7.0cm、幅2.1cmの2種類があり、8点すべて本郭廃棄坑 (004) 出土。裏面ないし表裏面に漆が付着し、138、139はそれ



第11図 出土遺物 (5)

ぞれ2枚重なった状態で出土している。両端をわずかに曲げた138、139等は草摺部の、また大きく屈曲した140は長側部の小札であろう。

鉄釘(113～131)は現存長2.2～15.5cmで、大半が廃棄坑(004)出土。断面方形をなす鍛造品で小形のものが多い。頭の形態には屈曲させるもの(a類)、左右に膨らませるもの(b類)、四方に大きく膨らませるもの(c類)の3種類がある。

小柄の柄金具である135は現存長8.1cm、幅1.4cmの青銅製で、文様は観察できなかった。133は小柄の柄部分で、現存長9.9cm、幅1.2cmで青銅の錆が表面に付着しているので、あるいは132と組み合わせになるのかもしれない。ほかに小柄ないし小刀の柄と思われる134、135があり、4点とも本郭廃棄坑(004)出土。

ほかに本郭廃棄坑(004)からたがね(131)、刀の鉄製柄金具(136)、縁部を肥厚させる鉄製の鑄造品(兜金具?151)、棒状の銅製品(154)が、ほかの廃棄坑(002)から銅製縁金具(155)、本郭包含層からはしのぎが見られる鉄鎌(149)と環状の銅製品(152)が出土している。北郭の出土品には方形孔を穿った鉄製円盤(148)や、銅製の把手(153)がある。

v) 考 察 一久野城跡平成元年度調査出土の陶磁器が提示する諸問題一

今回の調査では、陶磁器、瓦、金属製品、硯などさまざまな遺物が出土した。ここでは久野城に係わる陶磁器の年代観について検討を試み、陶磁器が示した問題点を提示し考察とする。

まず、中国製磁器の年代観については小野氏の見解がある(小野 1982)。小野氏は、明代の染付磁器を日本各地の城館跡の存続年代から碗A～F群、皿をA～F群に分類している。今回の調査で得られた染付磁器は、碗では碗1類が小野氏の碗IないしIVに該当し、染付碗CないしD群に含まれるものである。小皿1類—a、bは小野氏の皿VI、VIIで染付皿B1群、小皿2—a類は小野氏の皿Iで染付皿C群に該当している。これら、小野氏分類に対応する染付碗皿類は、少ないながらも小野氏の編年ではほぼ文明年間(1469)～永禄年間(1570)の間に収まるものである。ほかの小野氏の分類に対応できない染付の小坏、小皿2—b類なども遺構内の共伴関係から同時期のものと考えている。

今回の調査で出土した白磁は森田氏の分類(森田 1982)によるといずれも白磁E群に属しており、16世紀代の年代が与えられている。天正元年(1573)焼失の一乗朝倉氏館の出土資料と組み合わせが一致するので天正年間以前のものと思われる。

青磁は、分類が対応できるものは少ないが細線蓮弁文が施文されている20の碗は、亀井氏の分類ではB—2類に該当し16世紀前～中の年代観が与えられている(亀井 1980)。ほかの碗1類、2類なども、瀬戸・美濃産陶器の共伴関係から16世紀前～中のものと考えている。

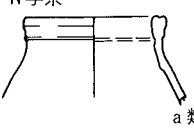
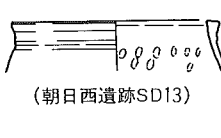
以上のように中国製磁器については、現在の小野氏の年代観を中心に考えると文明年間～天正年間以前のものが主体といえる。

次に瀬戸・美濃産陶器について検討してみよう。瀬戸・美濃産陶器についての年代観は、井上氏により検討されている(井上 1983 1985)。井上氏によると、(1)大窯の始まりは延徳3年(1491)に伊勢新九郎長氏により滅亡させられた葦山町堀越御所(御所之内遺跡)に大窯初期の製品が見られることから15世紀末とし、(2)大窯I・II期の製品が天正元年に落城した滋

賀県小谷城や福井県一乗朝倉氏遺跡から出土していることから大窯Ⅱ期の終末を永禄年間末（1569）に置き、③長石釉の出現（白志野製品）に見る大窯Ⅴ期の開始を、大坂城、根来寺、堺の環濠都市などのあり方から天正11年（1583）～13年（1585）に置き、大窯Ⅰ期を1490～1530年、同Ⅱ期を1530～1570年、同Ⅲ期を1570～1580年、同Ⅳ期を1580～1585年、同Ⅴ期を1585～1610年までと推定年代を示した。その後、愛知県沓掛城址の池SG01で大窯Ⅰ・Ⅱ期の製品と天文17年（1546）の紀年銘の入る木簡とが共伴し、この池が沓掛城の落城の永禄3年（1560）直後に埋め立てられたと推定されていることから、大窯Ⅱ期の製品は少なくとも1560年には成立していたこと（豊明市教育委員会 1986）、愛知県朝日西遺跡のSD13で大窯Ⅴ期の製品と文禄2年（1593）銘の大窯Ⅲ～Ⅳ期の灰釉筒茶碗と慶長3年（1598）、4年（1599）銘の木製卒塔婆の共伴が知られるようになった（服部 1986）。文禄2年銘の筒茶碗以外は、井上氏の見解を支持する資料である。

しかし、井上氏の編年の実年代は、大窯Ⅰ～Ⅱ期は1490～1570の80年間、同Ⅲ～Ⅴ期は1570～1610の40年間ということになり大窯Ⅰ～Ⅱ期が非常に長期であることになる。また、足立氏は静岡県内の城館跡出土の陶磁器の分析から大窯Ⅰ・Ⅱ期の製品が天正年間初期（1573）まで、同Ⅱ・Ⅲ期の製品が天正18年（1590）までに主体となることを指摘され、大窯Ⅳ期の以降の開始実年代が天正18年以後のこととなる可能性を提示し、井上氏の実年代案に異議を唱える意見もある（足立 1986）。後者の各編年期の存続時期のばらつきについては、最新の井上氏の編年では大窯Ⅰ期とⅡ期を2細分し1期約20年としており（井上 1989）、これに同調するかのように従来の5期区分にとらわれることなく藤沢氏は瀬戸大窯の編年を3様式5段階とし、1段階約20年とした編年案を提示している（藤沢 1986）。また、藤沢氏と同様に2様式4段階とした伊藤氏の編年案などもある（伊藤 1988）。後者の問題については、例えば近年朝倉館の報告書が刊行され（福井県教育委員会 1979）、その中に大窯Ⅲ期の資料も見られることから、天正元年以前に大窯Ⅲ期が遡る可能性がでてきており、足立氏の見解とは違う結果となってきている。紀年銘の伴わない城館跡の資料については、それが伴う遺構の分析や遺物の一括性の問題、落城・廃城後の再利用の問題、大窯の開始時期の確定問題が係わっていることから足立氏の見解を一概に否定する根拠はない。また、前者の問題についても焼津市道場田遺跡第3地点の土坑G—23より享禄2年（1531）と書かれた紀年銘木簡と古瀬戸様式後期末～大窯Ⅰ期初頭と考えられる口縁のみに灰釉の施された小皿が共伴する事例（焼津市教育委員会 1984）もあり、大窯Ⅰ期の始まりが享禄2年前後で、大窯Ⅰ～Ⅱ期の存続時期が短くなる可能性も残されている。ただし、紀年銘遺物の伴う資料については、その一括性の検討が必要となる。

常滑産陶器については、野間古窯類似の製品（a類）が大窯Ⅰ・Ⅱに伴うということが判明した。このN字状口縁の終末的な型式のものは、山梨県新巻村出土の甕が同型式で、古瀬戸後期末ないし大窯Ⅰ期の初頭と思われる口縁のみの灰釉施釉小皿が伴っている（小野 1981）。前述した朝日西遺跡のSD13の資料中に、久野城出土よりもさらに後出的な甕である中野氏編年の16世紀後半に編年された甕（b—1類 中野 1986）と大窯Ⅴ期の製品が伴っている。さらに朝日西遺跡の甕より後出的でN字からY字口縁への移行形態と思われる甕（c類）が、湖

年代	15世紀末～16世紀中	16世紀後～慶長9年(1604)	慶長9年(1604)～17世紀中?
並行	大窯Ⅰ～Ⅱ期	大窯Ⅴ期	大窯Ⅴ期以降
型	N字系  a類 (野間古窯)	Y字系  b-1類 (朝日西遺跡SD13) c類 (長谷元屋敷遺跡Ba類)	b-2類 (長谷元屋敷遺跡Bb類) d類 (長谷元屋敷遺跡Bc類)
式			

第12図 16世紀代の常滑産甕の編年図(案)(各報告書より再トレース作成)

西市長谷元屋敷遺跡で明応地震群(1498年ないし1499年)と慶長地震群(1604年)の間の時期になると推定された5層中より出土している。また、長谷元屋敷遺跡では慶長地震群以後の層から朝日西遺跡と同型式のb類甕も出土しているので、b類甕は17世紀初頭まで使用されていた可能性がある(b-2類 湖西市教育委員会 1987)。これらの事例から、久野城出土の常滑産甕(a類甕)は大窯Ⅴ期以前すなわち古瀬戸後期末ないし大窯Ⅰ期～Ⅲ期ぐらいの幅に収まるものと考えて大過なく、16世紀代の甕の変遷は第12図のとおりに押えられると思う。

このように現在考えられている15世紀末～16世紀陶磁器編年の年代観から、今回久野城より得られた陶磁器の年代観についてまとめてみよう。久野城で得られた陶磁器は、本郭の廃棄坑(004)では大窯Ⅰ・Ⅱ期の製品が主体となり古瀬戸様式の陶器は1点も含まれていないことが確かめられたので、これが久野城の成立時期と推定されている明応年間(1492～1501)に大窯Ⅰ期の成立が遡る可能性がでてきており、井上氏の大窯Ⅰ期の成立を支持するようである。また、廃棄坑と初期の整地層の大窯Ⅰ期の製品のなかに初期のものも含むので、明応年間の中かあるいは明応年間のごく近い時期に大窯が成立した可能性も指摘できる。

つぎに下限を示す資料について検討してみたい。94の大窯Ⅱ期新相～Ⅲ期に比定される瀬戸・美濃産すり鉢が本郭整地層の下層中から出土しているという不安材料があるが、この層からは27のような大窯Ⅰ期古相になる天目茶碗も出土しているので、この整地層を大窯Ⅰ期古相の時期とし94は混入と見ている。また、志戸呂焼ないし初山焼と見た稜皿の48は、大窯Ⅱ期新相ないしⅢ期に並行しそうな器形をもつが、稜皿の器形と鉄釉総掛けの製品という手法は、県内産の志戸呂焼、細江町の初山焼では知られていない(細江町教育委員会 1985)。志戸呂焼は足立氏によると天正年間成立(足立 1982)、柴垣氏は大窯Ⅲ期並行(柴垣 1988)、前川氏は大窯Ⅲ期新(小期6)並行(前川 1989)、同じく初山焼は足立氏によると16世紀前半、柴垣氏は大窯Ⅱ期新並行、前川氏は大窯Ⅲ期古(小期5)となり一定でないが、初山焼を志戸呂焼よりも一段古くしている点は共通している。48の稜皿が出土した南北溝(001)は廃棄坑(004)

よりも新しい遺構であるので大窯Ⅱ期古相よりも同時期か新しい根拠になるが、従来知られている資料よりやや古いものであるため、今回は大窯Ⅱ期新相の段階並行の初山焼と考え柴垣氏の説を支持したい。北郭では、下限の資料としては大窯Ⅴ期になる白志野小皿が出土している。上限の資料は灰釉小皿の破片が出土しているが、時期はよく判らなかった。

以上のように、江戸時代に降る資料を除くと本郭では廃棄坑(004)や暗褐色土の包含層(整地土?)および西郭の礫溜出土の陶磁器はいずれも大窯Ⅰ～Ⅱ期並行期のもので、本郭の暗褐色土下層(整地土?)は大窯Ⅰ期古相になる可能性も指摘できたが、南北溝(001)は大窯Ⅲ期になる可能性もある。北郭の下限資料は大窯Ⅴ期で上限時期は判らなかった。これを井上氏の年代観に準拠すると、本郭、西郭の陶磁器は明応年間(1492)～永禄年末以前(1569)のもの、さらに廃棄坑(004)は永禄3年(1560)以前の時期幅が考えられる。北郭は、天正11年(1583)～慶長15年(1610)に下限を求めることができる。

ここで、久野城関連の史料の中で、久野城域に存在したと考えられている座王権現社の棟札に注目してみたい。永正7年(1510)の本間宗季の軍忠状によると、久野城は座王城と呼ばれていたらしく久野佐渡守(宗隆)の名前も見える(湯之上 1983)。座王権現社は江戸時代の寛文2年(1662年)の絵図によると久野城北側の丘陵、現在の六所神社の位置に建てられていたものと考えられる(袋井市立図書館 1986)。座王権現社の棟札の古いものは、天文4年(1535)と天文14年(1545)のものが現存している。天文14年の棟札のなかに「願主弾正忠同三郎泰宗」の名前がでており久野氏一族の者と考えられるが、久野氏関係系図には名前がでてこない(袋井市役所 1981)。このことにより、座王権現社の造営は棟札から天文4年に遡ることが確かめられた。「弾正忠同三郎泰宗」なる人物が久野氏であることは確認できなかったが、天文4年、天文14年の座王権現社の造営・改修時期と久野城(座王城)の改修時期と何らかの関係を持つと仮定するならば、久野城の改修に係わっていたと考えられる本郭廃棄坑(004)の大窯製品との関連がにわかに注目されるのである。大窯Ⅲ期の成立時期を永禄3年(1560)～永禄年間末以前(1569)の幅の中とし、大窯Ⅱ期の存続期間を30年～40年と見ると、本郭廃棄坑(004)出土の大窯Ⅱ期古相の成立時期は永正17年(1520)～天文9年(1540)あたりと見ることができる。本郭廃棄坑(004)の形成時期が天文4年(1535)あるいは天文14年(1545)であるならば、大窯Ⅱ期の成立時期が1535～1545年以前になり、井上氏の年代観を支持している。本郭廃棄坑(004)の大窯製品の下限は大窯Ⅱ期古相の製品であることも、さらにこの年代観を補強していると思われる。しかし、これは直接久野城の改修時期を記した史料からえられた考察でないため、本稿では可能性の域にとどめておくほかない。

ほかに、大窯Ⅰ・Ⅱ期並行の瓦とかかわりけの良好な資料がえられたが、これについては紙面に制限もあるので以後の報告の中で考えていきたい。本稿の大窯製品の考察は、井上氏のご教示によるところが大きく深く感謝の意を表したい。なお、実測図中の細別段階はほぼ井上氏のご教示に従っているが、一部筆者の主観も入っている。また、常滑製品については中野晴久氏、参考文献については足立順司氏からご教示をえた。ご教示頂いた内容を十分に生かしきれていないことと思われるが、先学、同輩各位のご批判、ご教示を賜りたい。

6. ま と め

平成元年度の発掘調査では、当初目的とした明瞭な建築遺構こそ検出できなかったものの、北郭の構造について貴重な資料を得、また本郭においては、陶磁器・かわらけ片をはじめ、久野城の生活を物語る多種多様な遺物を採集することができた。調査面積は約500㎡と、城域3万9000㎡に比べまだあまりにも少ないのであるが、以下、今までに知り得た所見を整理し、まとめとしたい。

i) 築城期について

出土した陶磁器の編年に従えば、その上限は15世紀末葉にあり、久野氏系図に記されているとおり、久野城の築城時期は明応年間（1492～1501）とみて大過ないと思われる。若干の弥生土器片または13～14世紀に位置づけられる常滑甕片が出土しているが、築城期に近く、それを遡る遺物は見られない。久野城に先行する館等の存在は認められなかった。

ii) 北郭の構造について

北郭では固く締まった基盤層（黄褐色礫層）を削り、平坦な頂部と急峻な斜面を造り出していた。また東から入り込む縦堀が掘削されていた。南端に堀切が残っていることはすでに述べたが、郭の北側を東西に走る道路も、当初は堀切であったと推定されている。検出された縦堀・犬走り、今も窪地（登り道）や帯状の平坦面となっていたように、当時の北郭の形態が現地形のなかに生き続けている可能性が高まった。こうした目で現況地形図を見直すと、西斜面には今回検出されたものも含め犬走り様の平坦面が2段確認でき、また東西両方向から尾根に入り込む窪地が他に1ヶ所認められる。西斜面を階段状に築き、南北両端に堀切を設け、縦堀によって区切られた少なくとも3つの郭が、土橋状の通路により南北に連結する構造を読み取ることができよう。

西郭においても犬走りや土塁の構築方法がそうであったように、久野城の郭の築成には基盤層を削り込む手法が多く用いられている。

iii) 廃棄坑について

本郭の広範な廃棄坑および西郭の整地土最上層に認められた礫溜の形成時期は16世紀中頃と判断される。この時期大がかりな郭の改修・造成を行っている可能性が高い。16世紀中頃といえば、久野宗隆・元宗の時代であり、遠江において徳川・武田の攻防が本格化する前夜にあたる。

廃棄坑の下から検出された柱穴はすべて掘立柱である。またこの廃棄坑に含まれていた鉄釘には小形のものが多い。出土陶磁器には輸入品・すり鉢がめだち、かわらけ・内耳鍋など食器・煮沸具も見られる。出土品の組成は中世の居館的色彩が濃く、久野城築成期の本郭建物の構造・性格を示唆していると思われる。

時期の降る礎石や19世紀後半に位置づけられる陶器片も若干出土しているが、廃棄坑形成期以降の本郭の遺構・遺物はあまりにも貧弱である。包含層の一部はすでに削平されており、断言できないが、16世紀中頃を境として、日常的な生活の場は本郭から他所に移ったと見ることも可能であろう。

発掘調査の実施にあたり、高橋久一鷺巣上自治会長、高林進鷺巣下自治会長をはじめ、地元・地主のみなさま、久野城址保存会会員のみなさまには、ひとかたならぬお世話になった。また現地図面の作成では、卒業論文執筆中でありながら広島大学学生安間拓巳氏の手をわずらわした。文末ではありますが、ここに記して深く感謝の意を表する次第である。

＜参 考 文 献＞

- 大庭 正八 1983 「袋井市域の自然環境」『袋井市史通史編』
- 井上喜久男 1983 「大坂城三の丸跡における初期近世窯の様相」『大坂城三の丸跡Ⅱ』
- 井上喜久男 1985 「近世城館跡の陶磁ノート(1)」『愛知県陶磁資料館研究紀要4』
- 井上喜久男 1988 「美濃窯の研究—15～16世紀の陶器生産—」『東洋陶磁第15・16号』
- 井上喜久男 1989 「戦国・桃山期の瀬戸陶器」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報3』
- 赤羽 一郎 1983 『常滑』 技報堂出版
- 足立 順司 1986 「静岡県下における廃城年代と陶磁器の年代観」『貿易陶磁器研究第6号』
- 足立 順司 1986 「志戸呂とその周辺」『日本やきもの集成2』 平凡社
- 足立 順司 1987 「内耳鍋の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究紀要Ⅱ』
- 小野 正敏 1981 「山梨県八代郡一宮町新巻村出土の陶磁器」『貿易陶磁研究第1号』
- 小野 正敏 1982 「15～16世紀の染付碗 皿の分類と年代」『貿易陶磁研究第2号』
- 森田 勉 1982 「15～16世紀の白磁の分類と年代」『貿易陶磁研究第2号』
- 亀井 明德 1980 「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山先生古希記念古文化論攷』
- 服部 哲也 1986 「朝日西遺跡出土の紀年銘資料及び共伴遺物」『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和60年度』
- 藤沢 良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』
- 伊藤 嘉章 1988 「瀬戸・美濃における大窯生産」『岐阜市歴史博物館研究紀要2』
- 中野 晴久 1986 「近世常滑焼における甕の編年の研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅱ』
- 柴垣 勇夫 1988 『静岡のやきもの』 愛知県陶磁資料館
- 前川 要 1989 「織豊期における瀬戸・美濃生産技術の地方伝播」『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報3』
- 湯之上 隆 1983 「戦国時代の袋井」『袋井市史通史編』
- 袋井市役所 1981 『袋井市史史料編1 古代中世』
- 袋井市立図書館 1987 『貫母藩領の絵図に見る袋井市の寺社』
- 湖西市教育委員会 1987 『長谷元屋敷遺跡』
- 焼津市教育委員会 1984 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』
- 細江町教育委員会 1985 『初山焼 釜下古窯発掘調査報告書』
- 豊明市教育委員会 1986 『沓掛城址』
- 福井県教育委員会 1979 『朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』

久野城跡関係史料・文献一覧

城郭に関するもの

1	藩 翰 譜	新井白石	元禄14年	当国第一の堅城……たとえ何万騎をさしむけても……
2	東海道名所記	浅井了意	万治2年	くつべ村、道より半里ばかり右の方に久能の城見ゆ……
3	久野御家覚書	久野宗俊	元禄15年	宗安御代には天守御座候処松下右兵衛殿在職の時分おろし申し候……
4	遠江城砦誌	村松藤喜許	天明2年	久野佐渡守宗隆が築きし居城也……
5	掛川誌藁	斎田茂先 山本忠英	文化年間	掛川城北門は、正保元年周智郡久野の城破却せられし時、彼の城追手の門を引て此に建つ……
6	遠州油山寺御代参之記	犬塚正雄	天保13年	久野の城跡……古の天守台今は小山の藪なり……
7	久野山清安寺墓地より	森 真現	昭和44年	三方に堀をめぐらし遠州きっての要害で……鷺が巣をかけたという老松も……
8	日本城郭大系「静岡県」	小和田哲男	昭和54年	標高34mの山頂を主郭とし……周囲約600mの丘城である……
9	大日本史料九～二	本間宗秀	永正7年	久野城は座（蔵）王城とも称していた……

城主の変遷、久野宗能、宗成に関するもの

10	目でみる袋井市史	原秀三郎	昭和61年	久野氏の系図、家康の麾下にはいったこと……
11	遠江国風土記伝	内山真竜	寛政5年	久野城は久野佐渡守宗隆の築城したものと言われ孫宗能、後に松下之綱、重綱、北条出羽守氏重と引きつがれ、氏重転封後廃城となる……
12	遠江史蹟瑣談	岩田孝友	明治41年	城址の概略、城主の移り替り……
13	古老物語談	山下立節	享保2年	創始、暦代城主、廃城等について……
14	久野(久能)考	杉山元衛	昭和49年	「地方史静岡」所載、諸文献に基づき誤謬を指摘解明する……
15	大日本史料九～二			家康判物 永禄11年 久野宗能并一門同心宛 家康判物 永禄11年 久野千菊宛 家康判物 永禄12年 久野三郎左衛門尉宛
16	姓氏家系大辞典	太田 亮	昭和48年	遠江の久野氏久野城に拠る、大永永正の頃……
17	先祖累功書	久野宗熙	明治2年	元書の儘写之とあり、元宗、宗能、宗成について……
18	油山寺略縁起	犬塚正雄	天保13年	代参報告書の一部 宗能は油山寺僧より還俗した、宗能、宗成を祀ったこと……

系 図

19	田丸久野家系図			弘化2年以前系図
20	寛政重修諸家譜			久野氏
21	袋井市下山梨久野家系図			

史 書

22	嶽南史	鈴木覚馬	昭和6年	史的に久野氏をみる……
23	玉城町史	金子延夫	昭和58年	田丸城主久野氏……
24	家康の臣僚	中村孝也	昭和43年	宗能を編年体に記述……
25	近世日本国民史	徳富蘇峰	明治38年	鼻欠淵の戦、2万の大軍久野城に迫る……
26	村山竜平伝	朝日新聞社	昭和28年	久野家の系図、宗能、宗成について……
27	掛川城攻防戦	山崎常盤		家康の氏真攻のあり様と原川大和守の忠節

治績に関するもの

28	油山寺御代参の記	犬塚正雄	天保13年	宗成、石盛を一律一石としての年貢……
29	下末木村差出帳		宝永8年	上記の実証
30	富士浅間宮由緒		天正年度	社殿建立
31	深見牛頭天王社		天正11年	社殿建立宗能
32	薬師如来勧請記		慶長6年	宗成、深見村に念持仏薬師如来を貸与する
33	梵鐘献納		元和3年	宗成村松村神明宮献納
34	油山寺三重塔献納		慶長16年	宗成
35	遠州越旧家亡家之記	犬塚正雄	天保13年頃	宗成に従って田丸に行った久野出身の家々
36	中世歌壇史の研究	井上宗雄		一万首作者の中に、久野三郎左衛門、久野下総守 藤原宗明の名が見える

(浅井喜作 田中元峰作成)

久 野 城 跡

—平成元年度基礎資料収集調査概報—

1990年3月30日

発 行 静岡県袋井市教育委員会

久 野 城 址 保 存 会

〒437 袋井市新屋一丁目1番地の1

印刷 ㈱開 明 堂 浜松市中沢町1—1

表紙の久野氏紋は「遠州周知郡久野郷村奈村油山略縁起」（玉城町教育委員会所蔵文書）より転載した。

版 図 真 写



久野城跡遠景（南より）



久野城跡遠景（北東より）



本郭廃棄坑（004）発掘状況（西より）



本郭完掘状況（西より）



本郭南半発掘状況（北西より）



北郭完掘状況（南より）



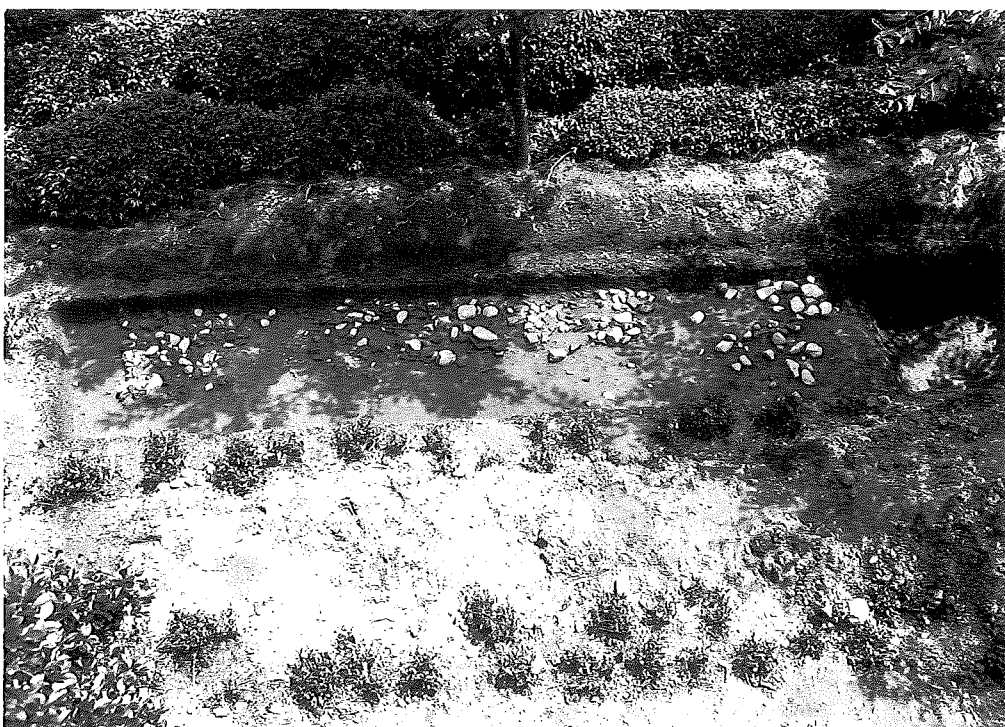
北郭縦堀発掘状況（北西より）



北郭犬走り発掘状況（北より）



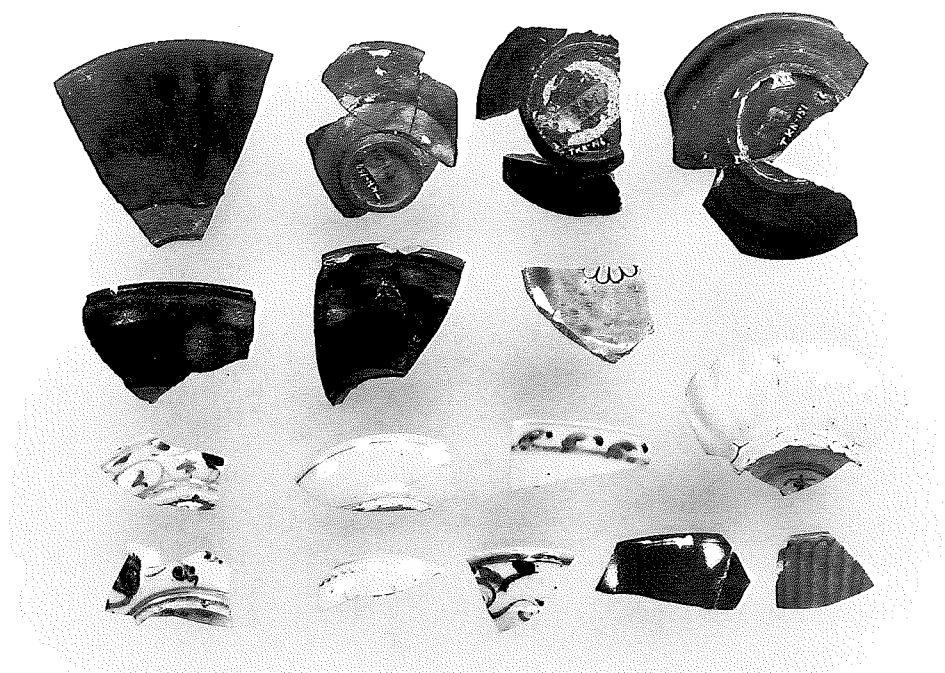
北郭南半完掘状況（北より）



西郭整地面（礫溜）発掘状況（北より）



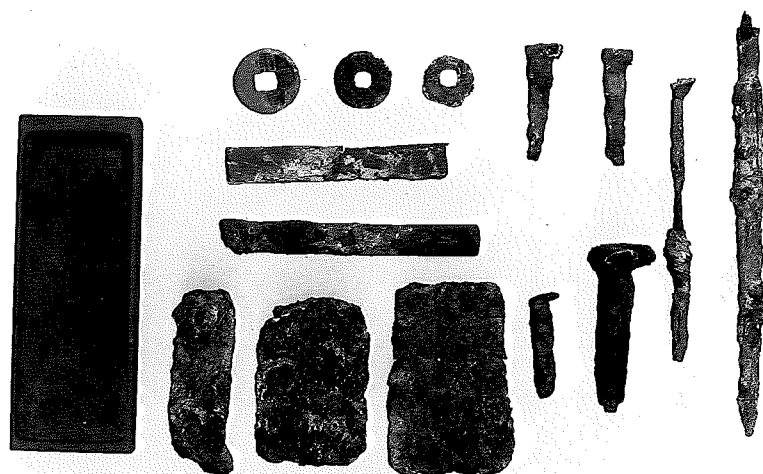
西郭完掘状況（東より）



瀬戸・美濃産碗・皿 中国製磁器



常滑産甕 瀬戸・美濃産すり鉢



銭貨 硯 鉄製品